

環境	生物	埋め立て前 (1996～1998年)	埋め立て工事中 (2003年)	埋め立て工事後 (2010年以降)
低地部	植物	中央低地部は、水田、耕作放棄地（様々なタイプの草地）が見られ、 <u>全体として多様性が高い湿生草本群落</u> であった。	<u>中央低地部の湿生植物群落は、埋め立てによりほぼすべて消失した。</u> また埋め立て地の大半は裸地であるが、一部に1・2年草（アキノエノコログサ、イヌタデ、シロザなど）や帰化植物（メリケンカルカヤ、オオアレチノギク、ヒメジョオンなど）を主体とする草地が見られた。	中央低地部の埋め立て部は、温浴施設や多目的スポーツ広場、ソーラーパネルなどの人工構造物が建設された。多目的スポーツ広場などの緑地の一部にはシバなどが植栽され、シロツメクサ、コメツツメクサ、ツボオオバコ、数は少ないがメリケントキンソウなどの帰化植物が見られた。また、 <u>下流に調整池ができたため、広大な湿地が出現し、降水によって水深が上下し、安定しないためポントクタデなど1年生草本が優占する湿生草地が広がった。</u> ここにはタコノアシなどの注目種の生育が確認され、自然性は高い。
	動物	耕作放棄地などの草地は、カヤネズミなどの小型哺乳類、エンマコオロギ、ショウリョウバッタなど草地性昆虫類の生息環境となっていた。	カヤネズミなど草地性動物の生息環境は消失し、これらの種の大半が確認されなかった。ただし埋め立て地に散在する草地ではショウリョウバッタなど草地性昆虫類が集中的に見られ、さらに埋め立て前は未確認のカワラバッタ（河原などの裸地に生息）が確認された。	長大のり面ではカヤネズミを確認。また、ニホンジカの食痕なども確認された。ソーラーパネル際でもシカ糞を確認した。
		水田、水路はトノサマガエル、ツチガエルなどの両生類の生息・産卵場、ニシシマドジョウやカワムツなど魚類の生息地となっていた。	埋立地中央部には湿性環境が消失したため、トノサマガエルやカワムツなど両生類、魚類は見られなかった。これらの大半は保全した2カ所の沢部（丁仏参道両側の沢）で確認された。	下流側調整池の広大な湿地環境では、イノシシ、ニホンジカなどの生息痕が多く、タヌキなどの足痕も見られ、よく利用していることが確認された。
周辺斜面部	植物	斜面部は全域が樹林（スギ・ヒノキ植林など）となり、 <u>一部に自然性の高いコジイ（ツブラジイ）林が分布した。</u> また、ヤマザクラが多く、春は美しい。	周辺斜面の樹林は、斜面下部を除き残存した。また埋め立てに伴う伐採で、林縁環境が広がり、林縁・伐採跡地に特有の植物（カラスザンショウ、ヌルデ、クサギ、アカメガシワなど）が見られた。	残存樹林部には大きな変化なし。
	動物	周辺樹林では、 <u>ムササビ、イノシシなど中・大型哺乳類が多く、オオタカやクマタカなど猛禽類の生息地</u> にもなっていた。	埋立地の周辺の樹林には依然としてムササビ、イノシシなど中・大型哺乳類が生息し、埋め立て地の林縁まで出現していた。また、 <u>近隣にクマタカが営巣した。</u> ただしオオタカは工事開始1年前の1999年から営巣しなくなった。	埋立地の周辺樹林には依然としてムササビ、イノシシなど中・大型哺乳類が生息し、埋め立て地の林縁まで出現している。また、オオタカ、サシバ、ハチクマなどが繁殖期に確認され、 <u>2022年にはクマタカが田代地区内にて再び繁殖活動に入る</u> など樹林性の動物にとっては重要な生息環境となっていることが確認された。
沢部	植物	当該地域の北北西に伸びる丁仏参道東側の沢は、コジイ林のほか、発達したスギ植林、コナラ林が見られ樹林の多様性が高く、さらに当該地域の中では植物注目種や大径木も多かった。	埋め立て工事を回避し保全した沢部（2カ所）には従前の環境が残った。そこでは、埋め立て改変部に生育していた植物注目種（カヤラン、シュスランなど）の移植地（JH：現NEXCOの保全対策）の一部とした。	大きな変化なし。
	動物	沢部（特に丁仏参道両側の沢）ではタゴガエル、モリアオガエル、タカハヤ、カワムツ、ヨシノボリ類の生息が見られた。また、 <u>海との連続性を示すモクズガニが確認された。</u>	<u>保全した2カ所の沢部（丁仏参道両側の沢）では、タゴガエル、タカハヤ、カワムツなど両生類、爬虫類、魚類を含む水生動物が集中して見られた。</u> しかし、埋め立て中の沢部では、小動物の確認事例は極めて少なかった。	保全した2カ所の沢部では、大きな変化なし。近自然水路の上流では、カワムツが優占するほか、 <u>モクズガニやヤマトヌマエビなど海との連続性を示す種が確認され、埋め立て後もこれらの種レベルでは海の連続性が確保されていることが示された。</u>

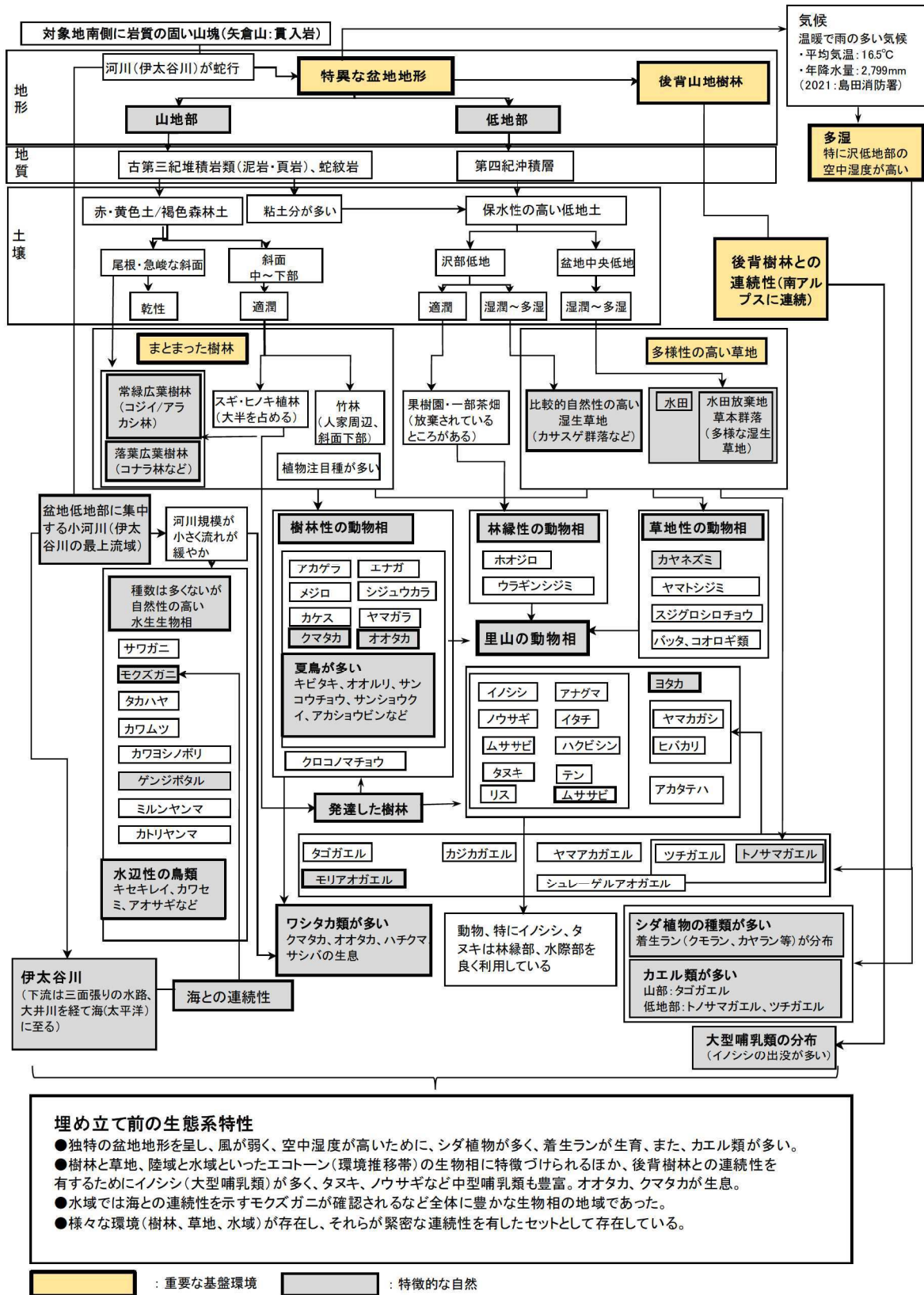
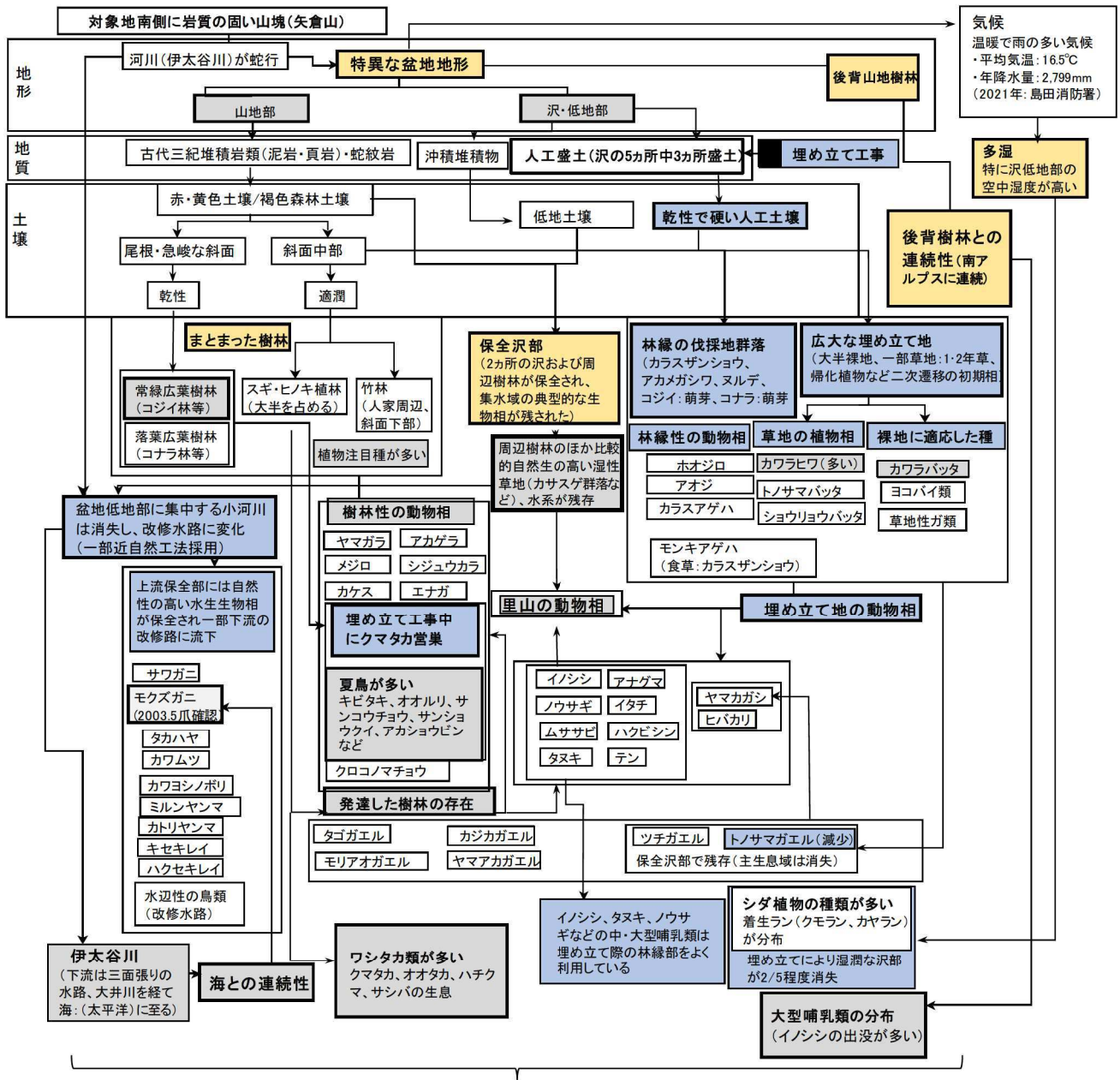
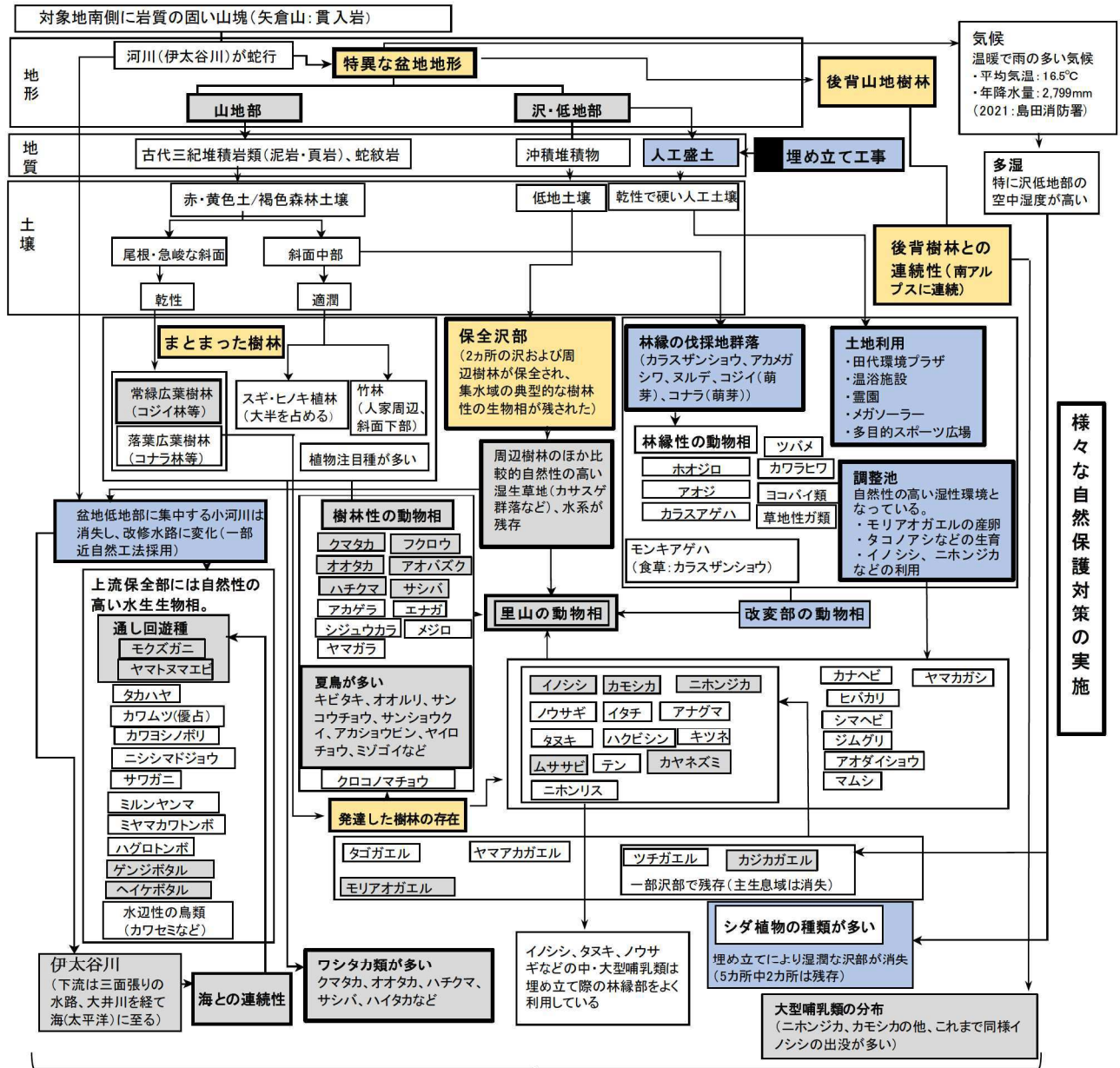


図 4.3.2 埋め立て工事前 (1996~1998 年) の生態系特性





埋め立て後土地利用時の生態系特性

- 広大な埋め立て部は、土地利用が進み、生物の生息が限られる。
- 一方、自然環境保全対策として完全に残した2カ所の沢部および田代地区下流に建設された調整池の湿性環境は周辺生物相の核的存在となっている。
- 樹林環境の豊かさを指標するワシタカ類や樹林性鳥類、大型哺乳類の生息。河川における海との連続性を指標するモクズガニやヤマトヌマエビの生息など、自然性の高い生物が確認されている。
- これは様々な自然環境保全対策(2カ所の沢の保全、ワシタカ類対策、緑地の保全、長大のり面對策、近自然工法水路、動物移動路、植物注目種の移植、モリアオガエル代替産卵池など)によって、改変前に想定された大きな変化は回避されたものと考えられる。

: 重要な基盤環境
 : 埋め立て工事・土地利用に関わる内容
 : 特徴的な自然

図 4.3.4 埋め立て後～土地利用段階(2010～2021年)までの生態系特性